

住民の理解は得られていません 玄海原発の再稼働を認めないことを求める請願書

2018年3月6日

佐賀県議会議長 石倉秀郷様

(提出者)玄海原発プルサーマルと全基をみんなで止める裁判の会 代表 石丸初美

プルサーマルと佐賀県の100年を考える会 共同世話人 野中宏樹

玄海原発反対からつ事務所 代表 北川浩一

【請願の趣旨】

九州電力は去る2月20日、玄海原発3号機の核燃料装填を終了、報道によると今月3月23日にも再稼働かと言われています。山口祥義佐賀県知事は「住民の理解が得られた場合には、再稼働はやむを得ない」と発言してきました。その住民の理解はどうやって得られたのでしょうか。

私たちは、2006年から玄海町はじめ各地の住民へ広報活動をしています。「これまで九電からの説明やチラシしかなかった」と、私たちの情報を知り、初めて知る事実には驚く住民が多くいて、原発再稼働に理解・納得していない県民がたくさんいることを確信しました。また、私たちも県民として、「東京電力福島第一原発事故を学ぶべきだ」「重大事故が再び起きる可能性が少しでもあれば、それが国策であろうと住民を守るために原発は止めてください」と、原発を憂慮する専門家の根拠も提示して知事や佐賀県議会に対してこれまで幾度となく要請してきましたが、県議会は2017年4月13日「再稼働容認決議」を可決、知事は2017年4月24日「県議会決議を極めて重く受け止める」として住民の理解は得られないまま再稼働に同意しました。これは、住民の意見を無視する人権蹂躪というほかありません。

以下、各地を訪問して住民から聞いた話の一部を述べます。

①唐津市肥前町(2018年1月31日)

「原発、怖かよ」「事故になったら戻ってこれんもんね」「原発の方から風が吹いてくる。事故になったらひとたまりもなか」「怖いのは分かるとるさい、上が認めたからしょうがなか〜」…この日も不安の声ばかりでした。

「原発はいらん！」「ここは原発からたった10キロもなか。事故が起きたらもう逃げられん」「自然がやられるけん、第一次産業はもうだめんなる。子どものことが心配」。農道で出会った80代のお婆さんは「逃げんよ、逃げらんもんね、こげな道ば…そこん丘に上がってみんね。あっちからいつでん風の吹いてきようと…癌の多かとも知っとくさ」。

②唐津市内(2017年12月2日)

中学生「この唐津を無茶苦茶にしないでほしい。原発反対です」。

③馬渡島(2017年3月26日)

島の人たちはチラシを喜んで受け取ってくれました。「原発は反対。こんな遠くまで来てくれてありがとう」「原発はなか方がよかさい」「時間があったらもっと話聞きたか〜」。また、「避難訓練はあつとるが、坂ばかりで避難場所というても行かれん」「事故はいつ起こるかわからんやろ。夜は漁に出て元気な男はおらんよ」「避難は、定期船でピストン輸送と聞いとるが、本当に事故になったら、みんな自分の船で逃げるさ。でも問題は唐津の港に船をつなぎとめる“もやい”が足りん。上陸でくんもんね」「避難先の江北町までバスで避難訓練したことはあるが、一番問題は島を出ることができるかどうかさい」。高齢者が多い離島の深刻な問題である要援護者問題について聞いてみると「具体的な話は全くきてない」。

④神集島(2017年5月29日)

「電気は足りとるし、事故が起きれば逃げられん、どがんもされん、10分で放射能が来る」「原発に賛成する人はおらんが、(悩んだ顔して)反対ばかりも出来んさ…」と、みなさん原発の被害を受けるのは自分たちだということをしっかり分かっておられました。しかし、島民の中には玄海原発の下請け会社に勤めている人もいて、「原発いらんとは言われん」「島の人と原発の話はしない」と話せないようでした。声なき反対の声はいたる所で感じました。原発を生活圏の中に感じながら暮らす住民の声でした。

「先日、50年ぶりの大火事があり、住民でつくる消防団で消火活動にあたった。風が強くて、隣の家まで

焼けた。朝で、男達が漁に出る前で、人がいたからまだよかった。火事があっても消防車があっても若いもんがおらん。消火活動が出来んのだよ」「原発事故が起きても、市職員さえいない島では、すべて島民自身がやらなければならない。

⑤伊万里市(2016年7～9月)

漁業者「事故になったら全部だめになる」。話題が福島の帰還政策のことになると「この国の官僚や議員たちの半分でも福島で暮らしてみろ！と言いたい」「ドイツも福島後に原発をやめた。日本も当然そうすべきだ。他のエネルギーをどんどん進めればいい」「事故は誰も責任とってないし、終わってないもんね」。

⑥玄海町(2012年4月28日～2013年2月23日)

「福島の犠牲を見てやっとなつた。今となつては反対」「原発の事は話したくない。そんな事話したらおおごと(一大事)になる。孫たちもいるからないほうがいい」「電気が足りれば原発無い方が良い」「福島のような事故が玄海で起きたら、私たちはもう逃げられん。福岡に出た息子や孫にここに帰ってこいとはいえない」「この地区では、本音で言う事はできない」「とにかく偉い人の言う通りにしかならん」「国が大丈夫と言うなら、避難道路なんていらんはず！国や行政は矛盾している」「フクシマの放置された牛の映像を見た。自分も牛を飼っている。なんとも腹立たしい」「放射能は目に見えん、感じらん。逃げられん、事故があつたら金も農地も故郷も失ってしまう。何にもならん」「今日は避難訓練しとるがバカげている。事故の訓練をしてどうするんだ」「町民会館が出来るまでは、カブトガニがぞろぞろいた。あさり、ホージャもいっぱい採れていた。なんもかんもおかしい」。

これらは、ほんの一部です。

このほか加唐島、長崎県鷹島、糸島市、佐賀市内など、これまでいろんなところで戸別訪問をしながら住民の話を聞いてきました。これが、住民の生の声です。原発のことについて県民の理解は得られていません。事実を知らされてさえいないのが現実です。玄海原発で重大事故が起きれば、九電のために住民は否応なしに被害だけを負わされる理不尽極まりない悲劇が起きます。被害は地元・玄海町にとどまらず佐賀県内はもとより世界中に被害が拡大することでしょう。今を生きる大人の判断が問われています。

原子力規制委員会の更田豊志委員長は安全性について、「リスクゼロを保証するものではない」と答えています。原発は事故大前提なのです。「国の審査を通過しているから安全だ」という山口知事の判断は、佐賀県民を安心させるものではありません。私たち県民は原発事故で放射能被害に遭ってもいいとは言っていません。知事は公式サイトの中で『山口よしのりの考え』として「人を大切に、世界に誇れる佐賀づくり」を掲げています。世界に誇れる佐賀、それは大自然を残すということです。原発事故は、何ものにも代えがたい自然を壊すものだとして東京電力福島第一原発事故が教えてくれたのではないですか。7年経った今も核燃料がどのようにになっているかさえ検証できず、ロボットさえ使えない状況です。今も原子力緊急事態宣言発令中です。

知事は玄海原発の再稼働問題に関し「広く県民の声を聴く」として、昨年「広く意見を聴く委員会」を3回、県内5か所での「県民説明会」を開催しましたが、参加者からは「再稼働反対」や「慎重に」という意見が相次ぎました。知事は九電に対し「うそをつかない」と約束を交わしています。このことは知事自身が県民に対しても守ることであり、県民の真の声を聞くべきです。守るのは九電や国ではないはずです。

2017年4月13日の県議会決議文に「玄海原子力発電所の再稼働を求める声を多く耳にし、再稼働やむなしということについての県民理解は、進んでいると考えるものの、安全性への不安の声や再稼働に否定的な声など、様々な意見があることは十分に認識しており、これを重く受け止める」とありますが、「やむを得ず再稼働」ということは、上記に述べている人々の不安は切り捨てられたこととなります。

住民の命と暮らしと安心を守っていくのが政治でなければならないはず。県議会の責任も重大です。

これらの趣旨から、以下のことをお願いします。住民の気持ちに立って受け止めていただくようお願いいたします。

【請願事項】

1. 原発に対する住民の不安を切り捨てないこと
2. 県議会として、山口県知事の玄海原発3・4号機再稼働同意の撤回を求め、再稼働を認めないこと